

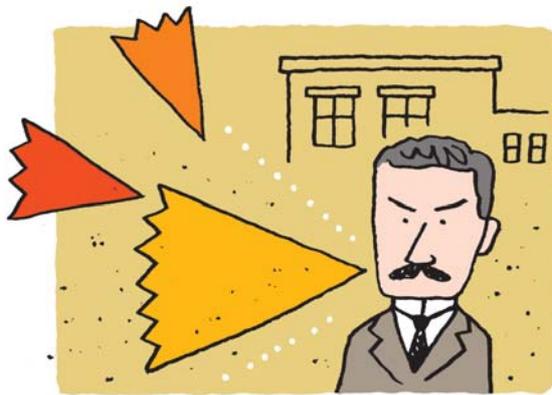
夏目漱石は朝日新聞社に入社した時、月給は二百円で、そのほかに給料二カ月分、または一カ月分の賞与あり、という約束を取りつけていた。ところが入社してすぐの頃に、臨時賞与というものを五十円もらって、烈火の如く怒って抗議の手紙を出している。賞与は四百円か、もしくは二百円という約束だったではないか。なぜ約束違反をするか、という手紙だ。

その件は、漱石のほうに誤解があったというところで、すぐ丸くおさまった。入社してすぐには本来賞与は出ないのだが、約束の賞与とは別に特に出したのだ、と説明されて漱石は納得し、礼を言うのだ。

しかし、誤解に基づいていたとは言え、賞与の額のことでも怒り狂うところが漱石にはあったのである。漱石は金にうるさいケチだったのだろうか。

調べてみるとどうもそうではない。漱石は自分の教え子たちが困っていると、実にしばしば金を貸しているのである。そういう時には金払いのいい人物だった。

思うに、漱石は金が嫌いだったのである。つまり、生きていくには金が必要だ、だから芸術家が才能を発揮するためには金がなければならぬ、なのに金はなかなか



絵・江口修平

## 金は好きで、大嫌い

清水義範

才能のある人間にはまわってこず、あたら金に振りまわされなければならない。そのことが漱石には不機嫌の種だったのでないだろうか。

金は必要だ。だが金に振りまわされるのは不快だ。その意味において、金が好きではない。

というのが、実は私の実感でもある。私は幼い頃から、お金があると嬉しいものだが、なくてつらい思いをさせられることのほうが多いと嫌っていた。そこで、お金に負けて、お金をほしがっちゃうことは相手の意地悪に屈することだと感じた。できることならお金を軽蔑したいと望んだのだ。

もちろん、生きていくためには金を軽蔑するばかりではやっていけない。私も、金を手に入れるべく努力してしまっている。

でも、根本にある金嫌いのせいで、私はこう考えて生きている。働いて金を得ることとは必要で、努力もしよう。しかし、そうではなくて、何かの利権にからむとか、うまい資産運用をするとか、とにかく、働かないで金を増やすことは金輪際望まないでおこう。そんなふうには心まで金に乗っ取られるのは、まっぴらだと思っているのである。

しみず・よしのり●作家。1947年名古屋生まれ。86年『蕎麦ときしめん』で前例のないパスティーシュ（様式模写）の分野を開拓。88年『国語入試問題必勝法』で第9回吉川英治文学新人賞受賞。『永遠のジャック&ベティ』『読み違え源氏物語』など著書多数。

